朝日アグリア

牛ふん堆肥を粒状加工

先陣切って指定混合肥料銘柄

肥料メーカーの朝日アグリア（村上政徳社長）は、昨年の肥料法改正で規格が新設された「指定混合肥料」の第一弾商品を上市。水稲向け総合土壌改良資材「稲サポ」と園芸オールインワン肥料「農家想い454」は、いずれも牛ふん堆肥入りで使用割合は約30％、約20％（乾物換算値）。ペレット状に粒状加工することで広域流通できる利点がある。「エコレット」などの粒状有機肥料販売シェアで国内トップクラスの同社ならではの造粒技術を活用した。関東工場で担当者に話を聞いた。

朝日アグリア＝東京都豊島区東池袋＝の肥料工場は、埼玉県児玉郡神川町にある関東工場と、昨年8月に訪問した千葉工場（千葉県旭市）、そして関西工場（滋賀県甲賀市）の3拠点。関東工場は、球形の化成肥料と円柱形のペレットの主力工場だ。

左から、浅野理事と木村肥料プロジェクト担当部長

理事で肥料開発担当の浅野智孝氏と営業統括部堆肥プロジェクト担当部長の木村享氏が応対してくれた。昨年8月に同社独自のアグレット（球形）を生産する千葉工場を訪問した時は12月の肥料法改正（施行）を目前に控え、今までは基準が厳しく、肥料原料としては使いづらかった牛ふん堆肥を積極活用した新たな肥料の市販化を考えているという話だったのでまさに「稲サポ」「農家想い454」は一般的な園芸作物の栽培に必要な堆肥・腐植酸、苦土石灰、NPK化成、微量要素を一度に補えるオールインワン肥料だ。

ペレット堆肥（農家想い）

肥料原料454」は待望の新商品となる。「稲サポ」は水田の地力向上に特化し、稲の生育に不可欠なケイ酸・マンガンを加えて、燐酸・加里を強化した水稲向け総合土壌改良資材。水稲の生育を強力サポートする。「農家想い454」は一般的な園芸作物の栽培に必要な堆肥・腐植酸、苦土石灰、NPK化成、微量要素を一度に補えるオールインワン肥料だ。

肥料原料のほとんどを輸入に依存している日本にとっては、国内未利用資源として畜産廃棄物の中で最も発生量の多い牛ふん堆肥を有効活用する意義は益々高まっている。畜産の競争力強化にとっても牛ふん堆肥を「金肥」に代える耕畜連携への発想の転換は必要不可欠な課題と言えるだろう。

こうした中で「指定混合肥料が突破口の一つになると思う」と木村部長。その先陣を切って、牛ふん堆肥を使用した新商品を上市したわけだが、他の肥料メーカーは様子見のところが多い。指定混合肥料への参入はありそうだが牛ふん堆肥の積極活用には及び腰なのも現実だ。

その辺りを浅野氏に聞くと「堆肥の造粒技術や環境対策で対応できる肥料メーカーは少ないことが要因だろう。特に堆肥品質という観点でいえば、牛ふん堆肥は敷料の木質成分が多く含まれるため水分率を高く維持して発酵促進させないと熟度が進まない。結果として水分率が全国平均でも50％と高く、粒状加工するのに適した30～40％を大きく上回っているのが利用拡大のネック要因」と語る。

そうした中でペレット状に粒状加工して広域流通できる今回の新商品は画期的といえる。肥料成分を堆肥と混ぜて粒状化することで、溶脱抑制効果などにより肥効が高まる。また、一般的な施肥機で散布することが可能で散布ムラが少なく少量施用で済む。省力化を図る耕種農家の強い味方となるだろう。